木本凡人と岡部よし子の回想

本本は、大分県のさる寺の子としてうまれ、ただしい僧名は正胤木本は、大分県のさる寺の子としてうまれ、ただしい僧名は正胤をいうのである。新藤東洋男は、かれの『九州地方の水平運動史』(注というのである。新藤東洋男は、かれの『九州地方の水平運動史』(注というのである。新藤東洋男は、かれの『九州地方の水平運動史』(注というのである。新藤東洋男は、かれの『九州地方の水平運動史』(注というのである。

九州水平社とその創立事情。」 (注1)部落問題研『水平運動史の研究』第五巻、研究篇135頁、「全

木本については、資料が乏しくわかっていることは少ないので、大の手がかりはない。

と言われている。岡部浅香(岡部よし子のこと)もそのひとりであ向学心のある部落の子女で奈良師範にはいるものは、かなりあった往時、奈良県立女子師範学校は、部落差別がひどくなかったので

いた。 、 浅香は部落の出身で、差別、にたいしてつよい反逆心を抱いてった。 浅香は部落の出身で、差別、にたいしてつよい反逆心を抱いて

水平社創立大会の直前の二月二十一日、大阪中の島公会堂で、知水平社創立大会の直前の二月二十一日、大阪中の島公会堂で、知水平社創立大会の直前の二月二十一日、大阪中の島公会堂で、知水平社創立大会の直前の二月二十一日、大阪中の島公会堂で、知水平社創立大会の直前の二月二十一日、大阪中の島公会堂で、知水平社創立大会の直前の二月二十一日、大阪中の島公会堂で、知水平社創立大会の直前の二月二十一日、大阪中の島公会堂で、知水平社創立大会の直前の二月二十一日、大阪中の島公会堂で、知水平社会では、

大正十一年三月三日の、水平社創立大会の演説会でも、岡部よし大正十一年三月三日の、水平社創立大会の演説会でも、岡部よし大正十一年三月三日の、水平社創立大会の演説会でも、岡部よし大正十一年三月三日の、水平社創立大会の演説会でも、岡部よし大正十一年三月三日の、水平社創立大会の演説会でも、岡部よし大正十一年三月三日の、水平社創立大会の演説会でも、岡部よし

者演説〉。

傍聴者として出席したりした。 夫の青十字凡人(木本のペンネーム)とともに、演壇に立ったり、夫の青十字凡人(木本のペンネーム)とともに、演壇に立ったり、水平社の大会には、

第二次世界大戦勃発。このさなか、木本が経営していた正露丸(ク 第二次世界大戦勃発。このさなか、木本が経営していた正露丸(ク たし、政府による国民精神総動員運動。そして、昭和十三年、国家 動に熱中していた最中、やがて、昭和六年、満州事変が発生、軍部 動に熱中していた最中、やがて、昭和六年、満州事変が発生、軍部 動に熱中していては、次項で詳述するので、ここでは、もう少し岡部 木本については、次項で詳述するので、ここでは、もう少し岡部

したトラックが横転して谷底に落ち、浅香は即死した。ぼしく、浅香は食糧買出しのため、高尾近在に出かけたとき、便乗活困難にくわえ、木本は結核を病み、戦時中のこととて、食糧がとレオソート丸)の製造販売は統制をうけ、営業不能におちいり、生

本は生涯をとじた。(注3) であっため、木本の生活は悲惨をきわめ、浅香のまえに木本の先妻そのため、木本の生活は悲惨をきわめ、浅香のまえに木本の先妻をが、時勢が時勢であったので、ほとんど義揖金もあつまらず、えたが、時勢が時勢であったので、ほとんど義揖金もあつまらず、えたが、時勢が時勢であったので、ほとんど義揖金もあつまらず、えたが、時勢が時勢であったので、ほとんど義揖金もあり大鉄の田辺にであったひとが、復縁して、木本を看病し、終戦の翌年、その地で木を活が立ちゆかなくなり、羽曳野に越し、終戦の翌年、その地で木本の先妻をいため、木本の生活は悲惨をきわめ、浅香のまえに木本の先妻をは生涯をとじた。(注3)

正十年)同人、平岡誠氏聴書。 (注3)浅香の横死、木本の最期などについては、旧『抹殺社』(大

二 木本凡人(青十字凡人)と水平運動の開拓

葛柏原の阪本清一郎は、つぎのように述べている。水平社の創立者のひとりで、その中心的な存在であった奈良県南

(注4)。 (注4)。

(注4)世界文庫版『水平運動論叢』阪本清一郎「水平運動の教訓。

11 第一章

きさつを示すものとして有益であるので引用する。る。これは、直接、木本らに関係はないが、『全国水平社』 創立のいの複刻版、世界文庫刊の巻末 「解説」)のなかで次のように述べていい本は、また、別なところ (水平社機関誌『水平』第一巻第一号

努力した。
「私たちの幼少の頃は、学校では、部落の子どもは席を別にされ、「私たちの幼少の頃は、学校では、部落の子どもは席を別になり、おし、時年になるにつれ、これちも、腕力で、これに対抗した。しかし、青年になるにつれ、これちの差別をとりのぞくにはどうすればよいかと考えるようになり、いるが、これに対抗した。しかし、青年になるにつれ、これたもの幼少の頃は、学校では、部落の子どもは席を別にされ、「私たちの幼少の頃は、学校では、部落の子どもは席を別にされ、「私たちの幼少の頃は、学校では、部落の子どもは席を別にされ、「私たちの幼少の頃は、学校では、部落の子どもは席を別にされ、「

まで、人種差別撤廃や、民族自決がとりあげられた。さらに、インドでは、ガンジーのスワラジ運動、アイルランドでは、シンフェン党では、ガンジーのスワラジ運動、アイルランドでは、シンフェン党では、ガンジーのスワラジ運動、アイルランドでは、シンフェン党では、ガンジーのスワラジ運動、アイルランドでは、シンフェン党では、ガンジーのスワラジ運動、アイルランドでは、シンフェン党をは、大種差別撤廃や、民族自決がとりあげられた。さらに、インドでは、対対の大阪・第一次世界大戦がおわって、パリでの平和会議も革命が起こった。第一次世界大戦がおわって、パリでの平和会議も革命が起こった。第一次世界大戦がおわって、パリでの平和会議も革命が起こった。第一次世界大戦がおわって、パリでの平和会議を基準の対域を表現を表現して、私たちに対しても、大きな影響をあたえ、大きな影響をあたえ、大きな影響をあたる。

月、東京で結成された日本社会主義同盟にも加盟し、安部、堺、山を担当し、いろいろ社会問題を研究していた。そして、大正九年十究会』を設け、私と、西光万吉、駒井喜作、池田吉作君らが、これへれたちは、大正八年に『つばめ会』の一部門として、『部落問題研

山氏らとも交わりをむすぶようになったのである。 川、大杉、岩佐(作太郎、アナキスト)らと親しくなり、賀川、杉

当時の私たちは、他の部落のひととは余り交際がなく、連絡の方法 に送ることにした。」 た奈良の松井庄五郎の……読者名簿によって、各方面の未知な同志 も少なかったので、私の親戚で、部落の改善運動をやっている先覚 そこで水平社創立事務所の看板をあげて活動をはじめた。しかし、 がおこなわれたときに、農民が都市の勤労者と結んだときにつけた たのだが、あとで、十七世紀半ばごろに、イギリスの民主主義革命 そのとき、 落民自身の力による部落解放運動をはじめることになったのである。 を聞き、大いに啓発され、自信を持つようになった。そして、 ると、すぐ、 とを力説されていたので、 者のない、善い社会をつくるために、連帯的な運動が必要であるこ 取と圧迫に苦しむ労働者、農民と親密に結合し、搾取者なく、 り、諸種の運動を行うこと、第二に、現在において、資本主義の搾 自身が、まず、不当なる社会的地位の廃止を要求すること、知識と 部落解放論」を発表し、その解放の原則として、第一に特殊部落民 勇気と熱情とを有する部落出身の少壮者が中心になり、 "レベェラース、〈水平者〉と相通ずるものがあることが判かった。 大正十年七月に、早大教授の佐野学氏が、雑誌『解放』に「特殊 大和同志会会長として〈明治の光〉という雑誌を発行してい 水平社という名は、私が、平等ということから思いつい 部落問題研究会のメンバーと、いろいろ相談して、 私たちは、早速、佐野を訪ね、その意見 集団をつく 迫害 帰え 部

しかし、政府や、要路の大官、貴族などによる恩恵的な、慈善事 偽善的な部落救済運動を拒否して、「部落民自身の手による

> 除名された経路については、第二章にゆずり、ここでは触れない。 多くの水平運動史のなかで、かれが水平社運動にアナキズムを持ち 部落解放」のさけびは、佐野学などよりもはやく、平野小剣らによ 誤謬である。 イとして警視庁に売りこんだ無政府主義者たちとして、水平社から こんだ代表者であるかのように位地づけ、そのうえで徳川公暗殺スパ 野の差別にたいする叫びを無反響におわらせた。もっとも、 者であり、佐野は、若手の売出し大学教授であるという落差が、 って叫ばれていたが(後述)平野はただのルンペンに近い印刷労働 ただ一言、平野小剣アナキスト説は再吟味すべきで、この通説は 平

表した。これを以って、アナキズムの影響をうけたなどと言うこと 岩佐としたしくなったと述べている。要するに主義者には、敬意を いて追究すべきで、概括的には成立しない。 はできまい。水平社運動におけるアナキズムは、個々のケースにつ 者同盟に加わることから、大正九年から十年頃にかけて、大杉栄や なお、阪本清一郎自身が述べているように、かれは日本社会主義

三 木本凡人の差別解放運動『青十字社』

様である。 すでに同じことを主張したことを述べたが、この頃の木本凡人も同 さきに、佐野学の主張をかかげ、佐野よりも早く、平野小剣が、

く知られているように、 木本の部落運動や、部落解放についての考えかたについては、よ 雑誌『種蒔く人』の大正十二年 (一九二三)

まかせて、本人はもっぱら、若い活動家たちの面倒に明けくれてい 近くで、征(正)露丸の製造販売を行なっていたが、商売は夫人に 胤といい、大分県の出身である。早くから大阪に出て、天王寺公園 ろで(『けい冠の友』第四五号『忘れえぬ人びと』(2)、阪本は、木本 なる文章の中にくわしい。青十字凡人が木本の別名であることは前 た。」ダブると思うが、木本のイメージをはっきりさせるために引用 についてつぎのように物語っている。「青十字凡人は、本名を木本正 に述べた。さきにも、阪本清一郎のことばを引用したが、別なとこ 二月号に、木本自身の筆になる青十字凡人の名で『水平社とは?』

えに、当時の検閲によって、ズタズタに抹消されているために、か なことが述べられている。 いるので、充分な解意をすることはできないが、大体、つぎのよう んじんなところで、まったく文意をくみとることができなくなって さて、『種蒔く人』にのせた木本の『水平社とは?』は、長文なう

本誌の余白の一部を拝借して、その事情を述べ、新に〈水平社〉を としては、現在、この運動を、表面、打ち切っているので、ここに にしてもらえぬかとか、或は進んで、運動の一員となって、ともに とか、この運動をいかなる方法でやっているのかとか、種々な方面 人類のために献身的につくしてみたいと思うが、さして貰えぬかな から問合わせがあり、かつ、君の運動に大いに共鳴したから、会員 青十字が今なお、部落差別撤廃の運動を継続しているかのように紹 「八月号(前年)に、「青十字とは?〉と題し、田治郎氏によって、 /されたものだから、青十字とは一体どんな組織で出来ているのか 色々の照会があるので、実は嬉しいことではあるが、『青十字』

> た動機を少し述べたいと思う。 ることにした。まず、物の順序として、凡人が、この運動を起こし 紹介し、以って回答にかえ、折角の共鳴せられた人々の厚意に報い

分等の大切な子供は任せられぬ〟と言って、その子を登校せしめず とばしり、心臓の血が逆流した。すなわち、これが始まりである。 かぎりない人類の破壊行為に対し、ムクムクと憤怒の泉が一時にほ って報ぜられた。ふと、その記事が目にとまった凡人は、その非道 猛烈な排斥運動をおこしている、ということを万朝報(新聞)によ 直に母校に奉職することになったところ、児童の父兄が、、エタに自 かな、その訓導は哀われにも それは全国に散在する三百万の同胞の為めだー 明治四十二年春、四国の片田舎の一小学校教員が、師範を卒え、 ああ。 しかし、悲しい

織して、部落民自身によって、 ま、奈良柏原部落の青年が、京都に於て、『水平社』というものを組 もあったが、運動をつづけ全国的に継続すること満1か年、 笑と、圧迫のなかにあって、恐怖を抱ける無自覚な部落民の妨害に ざめと泣き聞かされて、無理から圧さえつけていた憤激は頂天に達 三才の幼女の母、Cさんの、呪われた悲しい流離の境涯をば、さめ 百万同胞のために、戦いの烽火をあげ、天下に、解放-自覚、反省 した。として、「大正十年 (一九二一)二月一日』 けつぜん起って、三 て、大正九年六月十日の夕暗に、蕭然とおとずれてきた、かれんな 自力自活の域にはいって、ここに約十年の月日は夢のごとくに去っ 親のすねかじりに止まり、どうすることもできなかった。しかるに、 ・促進一の声を大にした。この間、妄想にとらわれた人間どもの嘲 幾星霜、心に反逆の焰が燃えながらも、学生の分ざいでは、 自覚集団の運動を開始せんとしてい たまた

狂喜快さいを叫んだのである。

14

もとづく。
もとづく。
もとづく。
かくて水平社は、自覚発奮せる青年有志が、血涙の苦心によってかくて水平社は、自覚発奮せる青年有志が、血涙の苦心によってかくて水平社は、自覚発奮せる青年有志が、血涙の苦心によって

- 一、哀願的差別撤廃を訴えることを止めて自覚せよ。
- 即ちこれである。
 一、同情的差別撤廃を口にするを止めて反省せよ。

真の解放運動は、部落民の自覚を第一とし、しかも、部落民自身真の解放運動は、部落民の自覚を第一とし、しかも、部落民自身の自覚解放運動が、完全に起こった以上、なお、『青十字』が、この運動を継続することは、かえって純真な部落民自身の、きよくうき運動を傷つけ、ほんどうの目的に到達し得ないからである。如上の故をもって、今は、まったく表面的運動はやっていない。だが、水平社の運動に対しては、かげながら、日に月に、盛大ならんことを祈っている。全然、無関係となったわけでは断じてない。

る。われわれに対して宣戦の布告をなし、挑戦的態度に出るなんて、つに不都合きわまる集団である、とんでもない奴が出来たものであめ、一般民の中に、水平社という団体はけしからぬ団体である、じすることは、真に水平社の紹介である。(中略) しかるに政府をはじれ入は『水平社』をもっともよく知る一人である。故に左に紹介

かれらは闘争をはきちがえて、階級闘争を忘れ、民族闘争(三百万かれらは闘争をはきちがえている連中がすこぶる多い。そびであるなどと激怒し、悪評を加えている連中がすこぶる多い。そがり、なお、このきらいあるに至っては、じつに呆れざるを得ながり、なお、このきらいあるに至っては、じつに呆れざるを得ない。(後略)

才前後ではないかと思う。この当時の木本の年令はあきらかでないが、推定では三十六、

十一、二年頃?)、すくなくとも、水平社三全大会(全水第三回大会)木本は、青十字社の解散のあと、時期は明らかではないが(大正

夫人は〈青光婦人会〉の肩書で、祝辞を述べている。すなわち、大正十三年三月の大会には、木本は〈先駆者同盟〉、浅香

大正十四年一月二十五日夜、木本の家で、幸徳秋水の迫悼会があった。その夜、その会に出席した河本乾次(注5)は、かれが木本であることをはじめて知った。それについて、河本はつぎのようにであることをはじめて知った。それについて、河本はつぎのようにであることをはじめて知った。それについて、河本はつぎのように聴に出かけたのですが、木本さんの鏡をみて、大正十一年三月の水平社に関する会(これは大正十一年二月二十日、中之島公会堂であった『平等る会(これは大正十一年二月二十日、中之島公会堂であった『平等る会(これは大正十一年二月二十日、中之島公会堂であった『平等る会(これは大正十一年二月二十日、中之島公会堂であった『平等る会(これは大正十一年二月二十日、中之島公会堂であった『平等る会(これは大正十一年二月二十日、中之島公会堂であった『平等る会(これは大正十一年二月二十五日夜、木本さんは、大正十四年一月二十五日夜、木本さんの。本本さんのところへ何か報告して、相談をし、指揮をうけている様子本さんのところへ何か報告して、相談をし、指揮をうけている様子本さんのところへ何か報告して、相談をし、指揮をうけている様子本さんのところへ何か報告して、相談をし、指揮を引いている様子で、これによって、本本さんは、大阪のアナキストだけでなく、水平社運動に、深いつながりがあることを知りました。

(注5)河本幹次氏書翰。

会の創立大会はめちゃめちゃになり、それとは反対に、水平社創立平社創立大会にあつまれ」と訴えたビラがいっせいにまかれ、平等英夫が開会の辞を述べたところで西光、岡部が壇上におどりあがり、英夫が開会の辞を述べたところで西光、岡部が壇上におどりあがり、大阪府知事、市長、元知事、岡本弥らが出席した平等会(恩恵的大阪府知事、市長、元知事、岡本弥らが出席した平等会(恩恵的

大会開催宣伝の目的は百パーセント、その目的を達した。

中元愛高その他多数の者がいた。 中元愛高その他多数の者がいた。 中元愛高その他多数の者がいた。 中元愛高その他多数の者がいた。 中元愛高その他多数の者がいた。 『青十字社』の主催で、大阪府下東成 で、共阪府下東成 で、大阪府下東成 で、大阪府下東成

四 差別運動から社会運動へ

動を追跡していくと、最後には水平運動につきあたる。木本の社会運動の原点となったものは水平運動である。かれの行

を立ててながれていたことを信じさせる。とっててながれていたことを信じさせる。といれの祖野は、次第にひろがって行くが、宿命とも見える原点はかれの視野は、次第にひろがって行くが、宿命とも見える原点はかれの視野は、次第にひろがって行くが、宿命とも見える原点はかれの視野は、次第にひろがって行くが、宿命とも見える原点はかれの視野は、次第にひろがって行くが、宿命とも見える原点はかれの視野は、次第にひろがって行くが、宿命とも見える原点はかれの視野は、次第にひろがって行くが、宿命とも見える原点はかれの視野は、次第にひろがって行くが、宿命とも見える原点はかれの視野は、次第にひろがって行くが、宿命とも見える原点はかれの視野は、次第にひろがって行くが、宿命とも見える原点はかれていたことを信じさせる。

にあらわれたことは書いたが、その後の全水大会に木本の名が公式られる。かれが『先駆者同盟』の肩書で、全水三全大会(一九二四)ちれる。かれが『先駆者同盟』の肩書で、全水三全大会(一九二四)ちれる。

次のようになる。である。それをかんたんにリストアップするとのに向けられるべきである。それをかんたんにリストアップするとしたがって、われわれの目はむしろ、当時の水平運動の状況そのもかれの魂の原点である水平運動に別離するということはありえない。に報道されたことはないようにみえる。だからといって、木本が、に報道されたことはないようにみえる。だからといって、木本が、

大正十一年(一九二二)七月、日本共産党創立。 大正十一年(一九二二)三月三日、全水創立大会(京都)。

大臣十二年(一九二三)三月二―三日、二金大太(である)入。 入正十一年(一九二二)十月、山川均門下の高橋貞樹、水平社へ潜大正十一年(一九二二)十月、山川均門下の高橋貞樹、水平社へ潜

遠島スパイ事件。 大正十三年(一九二四)三月三―四日、三全大会(京都)。十一月、

由)青年聴盟』創立。 大正十四年(一九二五)五月十五日、全水内アナ系組織『全水(自大正十四年(一九二五)五月七-八日、四全大会(大阪)。

日共フラク『全水無産者同盟』結成。 大正十四年 (一九二五)九月十六日、全水青同は発展的に解消し、

落解放運動五十年史年表』がある。 大正十五年(一九二二八)五月二―三日、五全大会(博多)。 大正十五年(一九二五)十月、アナ系組織『全水解放聠盟』結成。 大正十五年(一九二二八)五月二―三日、五全大会(博多)。

結成されていった。 結成されていった。 結成されていった。 結成されていった。 結成されていった。 結成されていった。 にすった。 は、初期水平社のきわめて簡単な年表であるが、大正十三年 は、初期水平社のきわめて簡単な年表であるが、大正十三年 は、初期水平社のきわめて簡単な年表であるが、大正十三年 は、初期水平社のきわめて簡単な年表であるが、大正十三年 は、初期水平社のきわめて簡単な年表であるが、大正十三年 は、初期水平社のきわめて簡単な年表であるが、大正十三年 は、初期水平社のきわめて簡単な年表であるが、大正十三年 は、初期水平社のきわめて簡単な年表であるが、大正十三年

刃侖、木本の周辺によ、大串をとかくこんし、こう、1月は、青同から、無視されたであろうことは、容易に推測できる。このような形勢下において、旧本部派系とみられている木本は、

いの問題が、かれをとらえたと言うことができる。 いの問題が、かれをとらえたと言うことができる。 の ボル派に対する党派運動に終始するよりも、当時においては、本本の運動は、もっとひろい視野のうえに立つようになり、当時においては、木本の運動は、大本ののである。 いの問題が、かれをとらえたと言うことができる。

渉して解放さした(注7)。 その頃、まだ住友が私有していた天王寺公園の茶臼山を、住友に交その頃、まだ住友が私有していた天王寺公園の茶臼山を、住友に交木本のやったことは、きわめて多方面にわたっている。かれは、

(注7)前掲、平岡誠氏聴書。

際し、木本は『失業者救済同盟』を組織し、恩恵を期待するのではそらく大正十二年前後であろうと思われるが、大不況時代の襲来に時代的に、はっきりしたその年代をしめすことはできないが、お

自治会、あくまで市民自治の組織運動もやった(注8)。自治会、あくまで市民自治の組織運動もやった(注8)。

五 木本凡人をとりまいた社会状況

(注8)河本乾次氏書翰。

本本にかぎらず、すべての労働者大衆に、アナとボルとのちがい 本本にかぎらず、すべての労働者、被差別者にも有益であった。木本が傍聴したことは言うまでもなかろう。

全国に行商してあるく行商人の泊る場所になっていて、その室は、て、一番上の、裏からみると三階になっているところは、正露丸をらみると二階建てだが、裏からみると三階建てになっていた。そしらみると二階建てだが、裏からみると三階建てになっていた。そしか本本の天王寺の家は、傾斜地に建っていたので、おもての通りか

17 第一章

死刑を執行されたギロチン社の中浜鉄にも関係がある。の創立者のひとり駒井喜作、平野小剣、大正十五年四月十五日夜、行商人ばかりでなく、主義者も、よく利用したといわれる。水平社

ては、平岡誠氏聴書。 (注9)総聠合を傍聴に行き、木本の家に一泊したいきさつについ

(注10)高尾平兵衛の研究家萩原晋太郎氏(リベルテールの会)の(注10)高尾平兵衛』の解説(一九七二年リベルテールの会)発行『高尾平兵衛』一二四~五頁)によれば、同盟は、大正十二年六月、市、機関誌『民衆新聞』を発行した。同盟の趣旨とするところれ、機関誌『民衆新聞』を発行した。同盟の趣旨とするところれ、機関誌『民衆新聞』を発行した。同盟の趣旨とするところれ、機関誌『民衆新聞』を発行した。同盟の趣旨とするという。

る。」
「資本主義社会組織の更改は、もとより、一般労働組合、あるでは一党派の事業であるべき筈がない。労働者および無産者大いは一党派の事業であるべき筈がない。労働者および無産者大

「かえりみれば、大正十一年十月、大阪にけおる組合総聠合大

ことごとに、潰裂を見んとしている。」

同盟の組織は、

- 一、青年部(吉田一、長山直厚)
- 一、小作人運動部(中村還一、中名生幸力)
- 一、労働者運動部(平岩巌、俵次郎)
- 一、国際部(鈴木厚)

である

高尾の結成した大正十年三月の『労働社』(機関誌『労働者』)は高尾の結成した大正十年三月の『労働社』(機関誌『労働者』)は高尾の結成した大正十年三月の『労働社』(機関誌『労働者』)は高尾の結成した大正十年三月の『労働社』(機関誌『労働者』)は高尾の結成した大正十年三月の『労働社』(機関誌『労働者』)は高尾の結成した大正十年三月の『労働社』(機関誌『労働者』)は高尾の結成した大正十年三月の『労働社』(機関誌『労働者』)は高尾の結成した大正十年三月の『労働社』(機関誌『労働者』)は高尾の結成した大正十年三月の『労働社』(機関誌『労働者』)は高尾の結成した大正十年三月の『労働社』(機関誌『労働者』)は高尾の結成した大正十年三月の『労働社』(機関誌『労働者』)は高尾の結成した大正十年三月の『労働社』(機関誌『労働者』)は高尾の結成した大正十年三月の『労働社』(機関誌『労働者』)は

理由と実際からであった。したがって、かれらの排撃したのは、 ものである。自主的労働者が知識階級を排撃したのは、こういう 本的労働運動者、野心家的労働運動者など、いろいろな者がいた 情者にすぎないものもあったが、そのほか職業的労働運動者、 の運動に参加したものは少なくなかった。その中には、単なる同 働運動が、次第に、その思想をふかめ、自主的運動たらんとした 正八年頃に生じた、印刷工組合『信友会』、新聞工組合『正進会』 美。かりにこれを労働者主義とよぼう。これについて、 な基盤のうえに立っていることがわかる。思想差の無と行動の讃 や、理論の外に、体験の事実から本当の真理をつかもうとしてい らは多くかれらから聞いた。しかし、今や、我々労働者は、 れから、最近流行をきわめている「ボルセヴィキ」の理論、それ えようとする。この結果は当然、労働者の自主的運動を妨害する したがって、労働者の運動を指導したがる。そして、この理想家 もたなかった。理想家的労働運動者は、とかく労働者のまだ明確 るが、かれらはまた、理想家的労働運動者にたいしても、好感を それらにたいして自主的労働者が反感にもえたのはもちろんであ ではあるまい。労働運動の勃興につれて、 などの中から出たもので、「この知識階級排撃の運動は、当時の労 る(後略)。、これにより『労働社』と『戦線同盟』が、ほぼ、 いがみあい、そのけちくさい争いの種を労働者の間にまで移し植 にもたないものに、かれら自身の理想を強いたがる。 ひとつの現われであるから、ここに一言しておくのも余計なこと (労働運動社) は以下のように言っている。もっとも、これは大 お互いのあいだのわずかな意見の相違から、なにやかやと 知識階級のひとで、こ その理想に 近藤憲二 資

いえば、大杉がチブスで聖ルカに入院、危篤状態であった。二月対する反抗の意をこめたという(平岡誠氏)。大正十年二月下旬と る一切の制度を抹殺する」という文句からとったもので、権威に ロポトキンの『キリスト抹殺論』のなかの「人類の共存に背反す 以後であろう、と言っている。『抹殺社』なる社名は、明治四十三 たが、平岡誠(既出)によれば、平野小剣は自身、まっ殺社に関 う。巣鴨には、この六名以外にも出入りする不特定の者が若干い 憲労働党員』である。巣鴨庚申塚にかれらの梁山伯があったとい じめ、社会主義運動としばしば激突をくりかえした。無名の結社 が出入りしたようなことはない。かれが出入りしたとすれば事件 係があるように言っているが(後掲)、まっ殺社事件のころ、小剣 久保田、加藤は全国水平社創立者のひとりである平野小剣らの『立 鋭一郎(25才)、平岡誠(23才)、久保田順(30才)、加藤昇(23才)、 右翼の北一輝は、大正九年一月、 上河内秀良(25才)、清川秀敏(23才)で、上河内、清川は渡支希望、 大川周明は十二年三月、猶存会を脱退するなど、右翼の離合もは 骨を労働運動社の祭壇から奪った)。十一年、北は西田税と知り、 組織する(この大化会員下鳥繁造が大正十二年十二月、大杉の遺 入り、岩田富美夫が北の勢力下にはいって、同年四月、大化会を (注11)大正九年(一九二〇)初頭、デモクラシーの時代は去った。 知識ではなくて知識階級であった(後略)。」(昭和四十四年、麦社 『抹殺社』は大正十年(一九二一)一月中旬結成した。団員は石黒 近藤憲二著『私の見た日本アナキズム運動史』 P三〇)、 大杉がチブスで聖ルカに入院、危篤状態であった。二月 湯河原にて、幸徳秋水が菅野スガとともに邦訳した、ク 河合徳三郎の大和民労会が、加藤一夫の『自由人』をは 上海から帰国して牛込老荘会に

二十七日朝七時、『まっ殺社』と名のる者が、電話線を切断し、麻布飯倉の式部官西園寺八郎(公望の父)邸に侵入、名刺を出してたところ、暴漢のひとりは矢庭におどりかかって、八郎の刀に手をかけたので、サヤが走って抜刀となったが、暴漢はじりじりとたところ、暴漢のひとりは矢庭におどりかかって、八郎の刀に手をかけたので、サヤが走って抜刀となったが、暴漢はじりじりとたところ、暴漢のひとりは矢庭におどりかかって、八郎の刀に手をかけたので、サヤが走って抜刀となったが、暴漢はじりじりとたところ、暴漢のひとりは矢庭におどりかかって、八郎の刀に手をかけたので、サヤが走って抜刀となったが、暴漢はじりじりとたところ、暴漢は、なおも追いすがって打ってかかり、八郎とこの騒ぎに警視庁に通報、暴漢はかけつけた警官によってとり押えられた。

大の際、暴漢は斬奸状のごときものを高く差上げ、「東宮渡欧延期その際、暴漢は斬奸状のごときものを高く差上げ、「東宮渡欧延期との際、暴漢は斬奸状のごときものを高く差上げ、「東宮渡欧延期を取計ってほしい」と八郎に叫び、八郎は「殺されても延期はでた。石黒等は家屋侵入、傷害、器物毀棄の罪で起訴されたが、実したためた、細川護立侯派の意向をうけた行動であったと言われて良子女王(現皇后)問題(色盲?)、軍備縮少反対などを訴状にしたためた、細川護立侯派の意向をうけた行動であったと言われたためた、細川護立侯派の意向をうけた行動であったと言われて良子女王(現皇后)問題(為害、器物毀棄の罪に出所した。

さらにまた、本事件に対し、『労働運動』大正十年三月二十日、

社会主義者の行為であるようにさえ言っている。それで一寸、 第七号に「『まっ殺社』一味」の題でつぎのように報道している。 合の落武者に、ある信用のない元社会主義者が加わって、出来あ 東宮外遊延期の祈願を行なったりしたのは、 それは、一種の国家社会主義だ。もっとも、西園寺邸の一件や、 れ等のために弁じておく。一、三か月前から、大道で呼売りして がった団体である。全国に七十余名とか、または二、三百名とか か、僕は知らない。自由協会、学生聠盟、純労会、自由労働者組 いた『大眼目』という小冊子を見ると、かれらの主張がわかる。 売禁止をうけ、その後、久しく中国に行っていた人物だ。『大眠目』 数年前、『純正社会主義』及び『国家論』という著述を出して、発 会長満川某君は、老壮会の関係者だ。また、幹部の北一輝君は、 あるらしい。それに関連して噂にのぼった猶存社というのがある の会員が有ると称しているが、実は十四、五名の青年の集まりで 「まっ殺社の実体についても、世間では臆説をたくましくして、 会』『抹殺社』なども、平野小剣と因縁浅からざるものがあるため の信者とか。こうした不てい日本人の背後に何者かがいるらしい は、北君の書いたもので、署名は何故か角田清君としてある。そ して、その角田君は、元自由労働者組合の幹事で、いまは大本教 (還一)と報道している。右に出てくる『自由労働者組合』『純労 煩をいとわず、長い注解を付した。 何主義によったもの

わけがあったのである。働総聠合大会の傍聴のために下阪したのは、それにはいわくつきの働総聠合大会の傍聴のために下阪したのは、それにはいわくつきのこの木本凡人の天王寺の三階に平岩や石黒、平岡たち三人が、労

ょにここにいることにする」とのん気なことを言い、バタバタとは

作人社』(第一次)という結社をつくって、農村運動をめざして起っ 設者同盟』を脱してアナキストのグループに走り、中名生と約束し た農村運動の計画を進行して、渡辺善寿や長島新と古田の三人は『小 もともと潜んでいたものが被膜をつきやぶったというか、古田は『建 これが中浜鉄だった。ことばを交わすのは、これが最初だった。 本当だということになり、埼玉県の蓮田に引越すことにきまった。 年一月の末になって、貧弱ながら『小作人』という雑誌を発行した。 た。これが古田の主義者としての第一歩だった。そして、大正十一 りだが頑丈そうなからだつきの男を長島が連れてきた。 それから、渡辺の発案で、農村運動だから田舎に居据ったほうが 古田は、早大で、 蓮田に引越したその翌日、長髪を肩までたらし、薄汚ない洋服の 『建設者同盟』へうつり、それからかれの内面に転化というか、 かれは、「放浪生活をしばらく止めにして、当分、君たちといっし 古田は、この男をいつか中名生の家で見かけたことはあったが、 みじかいマントを引っかけている、色のうす黒い、小づく はじめは『高津正道民人会』それから和田巌等

る」と、かれは言った。 厳の抜刀事件を知っているだろう。あれについて面白いはなしがあ羽織って、真黒に汚れた姿のまま鵠沼へかえってきた。「君達は平岩掲げて出席したのである。大会決裂のあと、中浜は、古いトンビを

輪話であった。(注12)。輪話であった。(注12)。輪話であった。(注12)。輪話であった。(注12)。

『死刑囚の思い出』によった。 (注1)右の部分は、前掲の『黒色戦線社』複刻版、古田大次郎著

たきをかけはじめた。古田はすぐ中浜と親しくなった。

働くよ」と言うと、中浜は、「君には無理だ、おれがはたらいて養っ間を獲得していた。古田はやしなわれているかたちなので、「自分も開え、家を立退くことになった。長島とは気が合わなかった。とに結果、家を立退くことになった。長島とは気が合わなかった。とに結果、家を立退くことになった。長島とは気が合わなかった。とに結果、家を立退くことになった。長島とは気が合わなかった。とに結果、家を立退くことになった。長島とは気が合わなかった。とに結果、家を立退くことになった。長島とは気が合わなかった。とに結果、家を立退くことになった。そうした労働のなかで、かれは仲黒光りがして頑丈になってきた。そうした労働のなかで、かれは仲黒光りがして頑丈になってきた。そうした労働のなかで、かれは仲黒光りがして頑丈になってきた。そうした労働のなかで、かれは仲黒光りがして積大いて養っていた。古田はやしなわれているかたちなので、「自分も関を獲得していた。古田はやしなわれているかたちなので、「自分も関を獲得していた。古田はやしなわれているかたちなので、「自分も関を獲得していた。」

たった。 たまは、中浜は、同じ立ん坊仲間をあつめて、自由労働者同盟。 を組織し出した。中浜一流の簡潔な文句をならべた宣言書もできあ を組織し出した。中浜一流の簡潔な文句をならべた宣言書もできあ を組織し出した。中浜一流の簡潔な文句をならべた宣言書もできあ を組織し出した。中浜一流の簡潔な文句をならべた宣言書もできあ を組織し出した。中浜一流の簡潔な文句をならべた宣言書もできあ

田六郎などという連中といっしょに住みこんだ。ていない活動家の中浜は、古田を鵠沼にのこして、東京にもどり、ていない活動家の中浜は、古田を鵠沼にのこして、東京にもどり、その夏、鵠沼の江口渙のとこに行った。しかし、一寸もじっとし

年の九月のことである。中浜は、この大会に『自由労働者同盟』を合総聠合』の大会があったのである。言うまでもなく、全水創立のちょうどこのとき、大阪天王寺公会堂で、前述した『全国労働組ージー

相手にして戦うかだ。僕は決して君等の手を、かれにふれさせはし んなバカげたことを止すか、あるいは、かれに向かうまえに、僕を はNによび出されて平岩巌が陣どっている新世界のカフエーにやっ 自信を持ち、 決して悪感は持ってなかった。Gにせよ、僕にせよ、同志と自称し い以前、足掛三年にもなる。会っていない。しかし、お互の上には ない。」結局、ブローニングも火を吹かず、仕込杖もさや走しること っている相手が大杉であることがわかる。それで中浜は、「君等がそ ある。しかし、この自信も、想念も、すべてが正しいものではなか にある連中でも、その個々人としては、気持よくつきあえるという ている連中にも虫の好かぬ奴等が多い。また、異った思想上の立場 橋のたもとで、そこが第一の関門と見えて中浜はつかまって、 者は大きな流れとなって、その中に大杉の後頭部も見える。阿倍野 ちょうど、そのとき、 東京に帰ってからだ」という返事で、そのことを平岩に告げると、 いが、いまはだめだ、これからが大会の勘どころで、目は離せない てくる。平岩を中心に、初めての顔であるー(石黒鋭一郎?)とH ったことが、すぐ、次の事件のなかに展開する……」とに角、中浜 室の留置場にほうりこまれ、九月二日、大阪府下即時退去で放免さ (平岡誠?)がいた。いろいろと話のやりとりがあって、平岩が狙 刑期はきわめて短かかった。 した警官隊に、仕込仗をぬいて切りこみ、その場で逮捕されたが、 るが、大杉まっ殺に奔走していた平岩は、解散後、通行をしゃ断 その場は納まり、このことを大杉に告げると、「会ってもい 旦つ、その信念をつとめて実践している部類の人間で 大会は決裂して、会場から吐き出された労働

先駆者同盟と水国事件

時期があった。 盟』の看板とならべて、『戦線同盟大阪支部』の標礼がかけられた一 六月)、戦線同盟労働部の俵次郎は、木本の天王寺の家に、『先駆者同 米村弁護士に射殺されたことから『戦線同盟』を知り(大正十二年 石黒とかを知り、ついで翌年には、高尾平兵衛が『赤化防止』団長 こうしたいきさつから、『先駆者同盟』の木本凡人は、平岩とか、

布施は木本の家に宿泊した。判決は無期だったが、しかし、検事控 等が中心となって奔走し、東京から布施弁護士が弁護のため来阪、 訴となり、控訴院判決. (死刑) は大正十五年三月におこなわれ中浜 かまえる)、大正十四年(一九二五)十月、一審判決があったが、木本 えられ(古田、和田久、村木はのがれて東京上へびくぼにアジトを は四月十五日刑死した。 そして、中浜が大正十三年四月、鐘紡社長武藤山治をおそって捕

この遺著の出版のすべては大串孝之助に一任されている。しかし、 逸見吉造が、刑期一年で出所したので、巻末の発行者は逸見、大串 寄遇していたしげおかとかいう青年が、木本を罵倒しはじめ、 は編集者となっている。発行所も大阪市住吉区にうつされている。 未決にいる大正十四年十二月二十日に出版された。 鉄の『黒パン』第一輯は、前記の事情で大阪北区刑務支所の二審の れ、その席上で、開会まもなく(来会者六、七人)、逸見吉造の家に 既出、 その獄中記『黒パン』の出版記念会が、『大阪いろは』でおこなわ 中浜鉄の『黒パン』巻末にのっている鉄の通信をみると、 つい

にはなぐりかかるという暴行ざたになって、記念会は滅茶苦茶にな 散会となった。

逸見は知っているはずだから、未前に防止するのがすじであると思 で持込むことは、理解に苦しみ、また、こういうふん囲気があれば りに暗流があっても、中浜の出版記念会だから、そうした席上にま かれは傍観する態度で、じつに不可解であった。 大阪のアナキストについては知るわけでなく、 か

のためか、 岸のところで、正露丸の店をかまえていましたが、多忙と見え、た 世界前の名呉橋の南詰を東にはいった南側、高津入堀川に沿った河 串孝之助について、当時、木本はすでに、天王寺から日本橋通りの 活動されていられたようです(注14)。僕は木本と一番親しかった大 従って木本は、『関西黒旗聠盟』(大正十四年結成)とは別なところで 気をわるくして、アナキストの集会には顔を見せなくなりました。 後組織された『関西黒旗聠盟』には参加されなかった原因になって いていはお留守で、夫人の浅香と世間話をしてかえる有様でした。 いるのではないかと推察している。そういう次第で、多分、木本は 僕は、 (注13)河本乾次氏書翰。 木本に、大変気の毒であった。こういう不愉快ないきさつ 木本は、大阪の一部のアナキストに愛想をつかし、その

平井等)、黒社 (久保、逸見)、「祖国と自由」社 (大串等)、南海先駆 しかった (部落運動の関係から)平井貞二氏書翰。 者同盟(河本)によって組織されていた。大串は木本と特別に親 (注14) 『関西黒旗聠盟』は、関西自聠を中心に、黒旗社(中尾、

> なうかということであった。 もなかったが、もっとも困まったのは、莫大な出費をどおしてまか つぎさき、奈良市東阪町の松谷喜三郎方において奔走にやすむひま 水平社臨時本部を、奈良刑務所未決監に近い、駒井喜作の実姉のと 落八十二戸の困窮は言語につくしがたく、収監者の差入、慰問等に 者が続出した。全国水平社では、この事態に直面し、ことに下永部 た。そこで県警は全員が出動、軍隊の出動を準備したが、二十日か 二全大会直後の大正十二年三月十七日に発生した差別事件から拡大 社と関西国粋会の暴力集団の対立に発展し、双方合わせて五千余名 粋会』仲西常義を中心とする差別集団とが対立し、これは全国水平 も最善の努力をはらった。そして、犠牲者救援に主力をそそぐため、 き、水平社側で、 ら二十一日にかけ、さしもの騒動も平静に帰したのである。このと いた駒井喜作、泉野利喜蔵は決死隊をつのり、二百名を先頭に、第 を負ったことから、『下永水平社事件』は昻奮の極に達した。これは にて、抜刀した国粋会員により、水平社員二名が切りつけられ重傷 が手に手に竹槍、木槍、棍棒、 したものであり、 ちょうど、その席に、水平運動史上、最大の『下永水平社』と『国 第三の決死隊を後続せしめ、 起訴収監された者は三十五名に達し、さらに起訴 遂に水平社本部から現地にきて総指揮にあたって 刀剣、猟銃等を携行し、 殺気は八尾、下永地方に充ちみち 八尾の路上

奈良東阪の全水仮本部は解散し、京都上京区南梅吉方の本部に復帰 保釈となって出所した。 した。水口事件の責任者駒井喜作や中村甚哉くんが、 の九月一日、前記の関東大震災が発生したのである。責付出所後、 起訴された水平社のひとびとは、六月十五日に責付出所した。 八月はじめに

のひとりである平岡誠が、下阪、木本凡人をたよってきた。 のなかに書かれている「大杉と刺客」にあらわれている『まっ殺社』

大正十二年九月、東京大震災があり、前記の中浜鉄の『黒バン』

資金の調達などで、私たち以上に心を悩まし、努力されていた。私 ていた(注15)。 は駒井さんと共に生活するなかで、その事情を知りすぎるほど知っ 「駒井さんは、この事件の中心人物としての責任から、公判の準備、

都の水谷等のほかに、大阪の日野、緒方、四方田等、 まず、弁護人をたのむのに苦労した。奈良の倉田弁護士を主任弁護 士がひきうけてくれた。 (注15)木村京太郎『水平社運動の思い出』(下) P188。 東京の布施、三輪、大阪の小岩井、 裁判の準備にとりかかって、いちばん心配したのは、 細迫、吉田、岸田、京 刑事専門弁護

奈良の家には、木村京太郎もいて、 阪天王寺付近にうつり、かれは、大阪に五年間ほど腰をおちつける。 場所)に連れて行き、平岡は、そこにやっかいになり、その後は大 奈良の駒井の姉ムコの家(水国事件のときの臨時全水本部となった 顔を合わせた。駒井は、平岡が東京の震災で焼け出されたと聞いて うとしたのは、その頃のことであった。平岡が木本をおとずれたち ようどそのとき、 であった。平岡はそういうことには経験があるというのか、 をするのであるが、その際、駒井が話に出したのは、水口事件のあ 面がついたといわれている(注16)。 当時の金で、千円を超す寄付をした。その結果、弁護料の大半の工 水国事件の処理に関し、応分の寄金を懇請したところ、某は承諾、 入知恵してふたりで、奈良市に住む、当時の多額納税者某を訪問、 前述の平岡誠が大震災のため西下して、木本凡人方に身を寄せよ とくに迫まってくる公判の弁護士の費用をひねり出す問題 所用のため木本方に来ていた駒井喜作とぱったり 変なとり合わせだが、共同生活

(注16)平岡誠氏聴書。

なつて、一年の刑が確定し、十五年末出所した。その時代は、もう やったやくざと駒井のあいだにいざこざがおこり、駒井は逃げるや 開業、遊女と親しくなったが、女は奉天に逃げ、抱え主がむかえに 力を掌握していた。駒井は、昭和七年秋、奈良市でマージャン荘を かった。かっての友、木村京太郎は、本部常任として、水平社の実 柏原旧グループは、水平社内部にいすを占める余地は、まったくな 水平社の内部事情は一変、四全大会から、実権は『青同』に移り、 村京太郎氏)、別説によると、自殺とも言われている(林隆人氏)。 工場などをやったが、胃ガンで昭和二十年死亡したとも言うし(木 くざを追って、 駒井は、その年の十二月、一審判決。十四年十二月、上告棄却と 昭和十四年四月に、刑期なかばで小菅を仮出所し、かん詰 日本刀で切りつけ即死させて、懲役十二年の刑に処

七 木本と自由联合

別運動からは手を引くとは書いているが、裏がわでの水平運動関係 労働運動にも関係した。以下に述べる日本車輌工組合の問題は、 を天下にはせた事件でもある。 が国の労働運動史上にのこる問題であるとともに、木本凡人の勇名 者の支援などにも、 木本は『解放』(前掲) に、水平社の創立によって、表面的には差 非常に力をかしたが、他面、先駆者同盟の名で

誇る日本労働総同盟が、 さいを守れ」によれば、「つねに自らを日本最強の労働団体をもって 『労働運動』大正十二年七月一日発行、第十五号所載「われ等の城 全力をあげて、 御用組合擁護、 スト切り崩

しを敢行しつつあるのを、いま、汽車会社のストに見る。

葛労働会は、この御用組合を擁護し、会社と結び、 要求したことによって、一層、その正体はあきらかである。しかる 戦の全国的戦列に加わることに反対し、機械労働組合からの脱退を とによって、 誠睦会の会長安藤某及び副会長向井某が、 た事実とによって、その実体はきわめて明きらかである。さらには 反し、誠睦会は、資本家のごきげんとりのために、工場に働いてい デー当日、日本車輌組合は、全員休業して示威運動に参加したのに 七名に対する復職運動ばかりであれば、行動を共にするものである ライキと同時に発した宣言で「われらは声明する。首をきられた十 弁護につとめている。日本労働総同盟の関係鉄工組合は、このスト の非をかくすために、あらゆるこじつけを用いて、卑劣なる行動の 者の幸福のための運動でないこのストライキに参加することを拒否 に際して、これを裏切った事実と、近くは、去る五月一日のメー 誠睦会がにくむべき御用組合であることは、 て、厚顔にもスト破りを勧誘している。しかも、かれらは、自己 労働者として兄弟を排斥する運動には反対するのは勿論、労働 つねに労働者の味方面をしている。日本労働総同盟、及び、南 または、関東車輌工組合が、他の戦闘的団体と、階級 役付職工の地位にあるこ 昨年四月の革新会争 官憲と手をにぎ

者である。車輌工組合の諸君が、かくのごときやからを排撃せんと あるとしても、労働者の唯一のとりでたる組合をかく乱する裏切り するは当然である。 向井の両名は、たとえ、かれ等が労働者で

またかれらは言う。「われわれは休んでいては、益々貧窮のどん底

ものだ」と。 トには反対する。 に落ちるばかりだ。かかる労働者の幸福に何等の刑益をなさないス そして将来の準備のためにこの際就業せんとする

働は『共産党』の若干名をもって組織されたものだ。かれらののぞ そのどさくさに利を得んとしている。そのために、かれ等は手段を 輌工組合を分裂せしめ、ひいては機械労働組合聠合会をかく乱し、 眼前の敵をすらわすれ、車輌工組合と誠睦会の間につけいって、車 たのである。自己権力の拡張のために目をくらまされたかれ等は、 今回の汽車会社のストライキに際し、ついに、その馬脚をあらわし であることは、われわれのつねに指摘するところである。かれらは むところは、労働者の解放ではなくて、組合利己心と支配欲の満足 べるのか。労働総同盟には職業的指導者がのさばっている。南葛労 えらばず、 総同盟、及び南葛労働会は、なにが故に、このようなへ理屈を列 資本家と結托し、官憲と取引きすることもあえて辞さな

れ! 労働総同盟を排撃せよ。正面には官憲と資本家。背後にはスト破り の総同盟を敵として勇戦しつつある車輌工組合兄弟の為に起ちあが をやつ等のやるままにまかせてはならぬ。労働階級をふみにじる 労働者諸君!ぼらくらは諸君の正しい批判にうったえる。このス

この問題は、 労働者のあいだに大きな関心をよんだ。

に書いている。 たとえば、機械連合会の神田は、 この問題について、 つぎのよう

「この東京汽車会社の労働組合の結束、提契を破棄さた、急造された第二組合の関東鉄工組合本所支部、これを支持して、急造された第二組合の関東鉄工組合本所支部、これを支持してように南葛労働は大阪に潜行し、中傷をふりまいて、それまで続いように南葛労働は大阪に潜行し、中傷をふりまいて、それまで続いまうに南葛労働は大阪に潜行し、中傷をふりまいて、それまで続いた東京、方を関東鉄工組合本所支部、これを支持してように南葛労働は大阪に潜行し、中傷をふりまいて、それまで続います。

五月二十五日、これがこの労働争議の発端である。」東京汽車会社が、車輌工組合幹部十七名のくび切りをしたのは、

本たちは、天王寺の木本方に引揚げる途中を、総同盟の連中は追い 土たちは、天王寺の木本方に引揚げる途中を、総同盟の連中は追い 土たちは、天王寺の木本方に引揚げる途中を、総同盟の連中は追い 土たちは、天王寺の木本方に引揚げる途中を、総同盟の連中は追い 土たちは、天王寺の木本方に引揚げる途中を、総同盟の連中は追い 土たちは、天王寺の木本方に引揚げる途中を、総同盟の連中は追い 大阪では、総同盟の圧力に押されて貸してくれるところがなくは、大阪では、総同盟の圧力に押されて貸してくれるところがなくは、大阪では、総同盟の圧力に押されて貸してくれるところがなくは、大阪では、総同盟の圧力に押されて貸してくれるところがなくは、大阪では、総同盟の圧力に押されて貸してくれるところがなくは、大阪では、総同盟の圧力に押されて貸してくれるところがなくながなく引揚げてくることができた。この総同盟撲滅演説会の会場を知っている総同盟の圧力に押されて貸してくれるところがなくは、大阪では、総同盟のを対したのに対したのに指し本で を知っている総同盟の圧力に押されて貸してくれるところがなくは、大阪では、総同盟の圧力に押されて貸してくれるところがなくないなく引揚げる途中を、総同盟の連中は追い 土たちは、天王寺の木本方に引揚げる途中を、総同盟の連中は追い

(注7)とり後ちは、三子宮でありまと可ぶ全ではずます。総同盟の連中は、待ちぼうけをくった(注17)。
総同盟の連中は、待ちぼうけをくった(注17)。
の家で協期していたが、東京の弁士の一行は、天王寺の後為田正毅の家で協期していたが、東京の弁士の一行は、天王寺の後為田正毅の家で協

この当時、大阪はもとより、東京や、その他の自由聨合系の人(注17)この談話は、宇野信次郎の話を河本幹次氏が録音。

たという。

その団員である平岩巌、この団員ではないが、嘗ての『まっ殺社』その団員である平岩巌、この田東労働組合総联合、これは失敗したとはいえ、かれらは木本のの日本労働組合総联合、これは失敗したとはいえ、かれらは木本のができよう。大震災のために、関東方面の活動家は四散せざるを得ができよう。大震災のために、関東方面の活動家は四散せざるを得かできよう。大震災のために、関東方面の活動家は四散せざるを得かできよう。大震災のために、関東方面の活動家は四散せざるを得かできよう。大震災のために、関東方面の活動家は四散せざるを得かできよう。大震災のために、関東方面の活動家は四散せざるを得かできよう。大震災のために、関東方面の活動家は四散せざるを得かった。

『戦線同盟』労働部の俵次郎(大正十一年九月の総聠合大会のとき

は、純労働者組合代表として自由)のなかに記憶しているため、その真相はわからない。

、本本が意識して使用したのではなくて、相手力のほうが、「青十字の木本」として頭のなかに記憶しているためによるが、それは、木本が意識して使用したのではなくて、相手れてくるが、それは、木本が意識して使用したのではなくて、相手力のほうが、「青十字の木本」として頭のなかに記憶しているためにで、一下のほうが、「青十字の木本」として頭のなかに記憶しているためにで、一下であるが、でき使用したのであろうという推測もできるが、その真相はわからない。

掲載されているので、ここに抄出する。一月号)によれば、その中に「亀戸事件と吾等の態度」なる一文が「社会運動」(注18)の大正十二年十一月十日発行の第七十七号(十とに角、関西の有力な労働組合である『大阪鉄工組合』の機関誌

より借覧。 (注18)大阪鉄工組合機関誌『社会運動』は、河本乾次氏の厚意に

とを述べ、この際、鉄工組合としても、代表者を派し、総同盟側と鉄工組合をおとずれ、総同盟が、無条件提契の意志を有していることで、感情の疎隔をきたせる総同盟とも、かれらに誠意があれば、多年、感情の疎隔をきたせる総同盟とも、かれらに誠意があれば、後契にやぶさかではない。折も折、戦線同盟及び青十字の諸君が、供である。これに対しては、全国労働組合の一致した力をもって、件である。これに対しては、全国労働組合の一致した力をもって、件である。これに対しては、全国労働組合の一致した力をもって、

であって、当局は、仲介者である俵、木本両氏を検束し、この会合 ではないので、対等に行動できるはずである」と。 意が必要である。勿論、吾等は、いつまでも総同盟にかかわるもの 言をはねつけた。 野君は個人的見解ではあるがと前言したうえ、きっぱり、鍋山の提 総同盟がスカップしたということを取消してくれといったので、 かと称して、こちらの生野、大川両君と会見、笑話でもよいから、 は水にながれた。ところが、 会見の場所と定めた市民館にあつまったのは、こちらの代表者だけ たうえでということになり、当日の代表をとりきめた。ところが、 ることはできないので、いちど先方と会って、かれらの意見を聞い 意見を諒承した。しかし、総同盟には策士がいて、にわかに信頼す 会見することをすすめたので、一応、仲介者の戦線同盟、青十字の 総同盟との間には長いいきさつがあり、第一に誠 のちに、鍋山は、個人的だがとか何と 生

る意志が明瞭にしめされている。そこには、自由聠合を脱却すである」と、態度を明かにしている。そこには、自由聠合を脱却すである」と、態度を明かにしている。そこには、自由聠合を脱却すでに、大阪鉄工組合は、大正十二年二月の大会で、坂本孝三郎すでに、大阪鉄工組合は、大正十二年二月の大会で、坂本孝三郎

れており、上述の姿勢は、うたがう余地もない。同じ、『社会運動』第七十七号の〈巻頭言〉には、次のように書か

〈巻頭言〉我等と普選運動―

がないとひとしく、議会運動に盲目にならぬと同時に、議会無視のてはならない。赤旗のレーニン、黒旗のクロポトキンを盲信する必要労働運動の一戦術として普選を主張した。もとより、議会を過信し「山本首相は普選断行を声明した。我等はかねて普選即行を主張し

大切である」(抄出、後略)。運動たると、直接行動たるとを問わない。より有効なる手段こそがことは明白で、闘争の戦術、形態は、目的に合致するかぎり、政治い生活の樹立である。この目的の為には階級闘争に拠らねばならぬ戦術も採らない。我等労働者の目標は、生存権の確立と、人間らし